俳風

柳多留 十六編

へ9
1147
16

門へ9特
1147
16

拾六篇

浅草新堀端　柄井川柳

[illegible]

ゆいせいをかんしるものでなく
ものの世界はやうやうふまる
べし　年号紙へかはらざる
ばらばらくろがくして法をのべく
ものの世で出る初年のいそうしる
はの海へおりるらびくしり
そうをはらひてちへかこはり
そうを馬を始しんかはかは上り
えめぐりて居る四ふるのりうる

ひかをはそうくんの世界はの
まはをかくしてつくやうはしい
ばしい紙のうえかえし
ア若でいひく商若かるく
大なんざ下世界りかまく
はなかはまくはるふぐうは
蝶ハまぶしのふもふをうう
うをもんをうをはうまてりり
ひひうを世界はうはふり

三世一おもて一下に礼とのはせ
時のかう大うそくらのと石神ざり
ちういこのやまーちやぐん豆ふばり
里いものやうかを面をくを七神えら
石さじさかくとういてかくはれる
うぬが表のゆふるなんかうを
江戸中小おのしくんうせざ
小かで茶うんとをづるかう見せ
琴の流あをくうんえら

えらべくえらかかうを矢をこうは
あををら石奥らうびて体へのに
いをやかうをくるはうをもをちざく
いさてをらこをはあをを居る
源五高四ぎ四ぎ京三やうく
めしををかうをあうこやらく
きらもざを大序のやかうを出
ちをををさうんさしいらはでを解わち
大法くこをうんないおてある

おやうん、大こうかてるおらうそ
おそのぶさぶか所らのふ野ん〳〵迄
家四イとしらるほ、ゑとセうく
ちしはやまそ代〳〵りんをれふ赤ら
いしやかうさふ祝うまうて男
そうか井ちうく一ものふ祝おとの
竹ゑつうかるでかをかうの後
苔のおうんうんのものつう
ちうゑとかつけ〳〵姫ふゑうまう

うまゑとそうをじうまうはうん作
竹ふうんく売かんさうはしうゆ
ゆ祝店ゑ〇ふ祝うべいかをうけ
こうそうんうそはて祝は笑て居る
一日ゝてセ人もゆび〳〵ゆう
ゆうはおうふいらゆ茶やいて
うんを見そうんうんうんと小ゆさ
ワさ〳〵ふ祝うそのとそふ会祝ゑ
ゑうゑゆそうくてつぐそのとふ計てう

[illegible]男せいの○をきてちんかをは
小石川原町[illegible]ふすまぬるき
きのふいせんを門口ぐらかする
二三[illegible]ん[illegible]はれて居る
ひしゃくをかぶせてさるや
[illegible]ハこをへらしてゐくを
もとむ[illegible]ちゃくに商とう
小[illegible]はのかげ[illegible]もも
[illegible]ハ[illegible]

船[illegible]のちゃくをのぼる
[illegible]ん[illegible]ちゃ船かさん
[illegible]ゐ[illegible]三人
[illegible]田とかう[illegible]
[illegible]ふ[illegible]
[illegible]ハ[illegible]
[illegible]ハ[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

てをのこしてふくくりなる事ハ
石ゝせいなりてかゝるにて
大らんと云こゝていを物をする
ちハいなるもれどゞ紙をハさし
所の間ゝてかゝれとしゝ出る
はかつるのゝかくも云うゝしゝ
そしら馬まひちをしゝは間出ん
きゝかゝ出ゝなゝきれどしをゝかく
ゝり云ゝハ大のゝあるものゝ

如屋ゝけてのゝをゝしゝ
すゞなゝ紙をすがんはゝ上る
書ハ添ゝなゝきゝをゝまゝ町
見めゝなゝて多ゝ新氏をおあすく
十九ゞゝいゝぬゝおゝはゝく而
二文ひゝゝしゝなゝ方帝又ゝやて
ゝんゝんゝんゝのかゝゝの二日ゝ
元ゝのハいゝゝゞやてをかゝつゝを
ゝ事ゝゝて出る乃ゝ正酒る

のこりなくてこうとをとんぼ屋さん
さうさわぎ　ひとさまるうついてくさ
中ゑへ　門ゑらしいなぐる　ゆら
そてをとはておだんとさう　色
さんぐ　ゑ藻　唐ぐ　すんて居る
肩ぐ　ちっとハ　死姿　こんて居る
ゑすの少江ふのぐ　ぶとん　ぶて居ら
せっちかれそてこしひする出る
いいこふかちいはやちどさちらく

大ゑ屋のこへでかん面をゆらんなり
おりろくゑ門とうんぶさき中網云
ぐゑへ　中町へおりて出る
ぐやとトケておもちそった　こいかさ
ゑ見ゑ紅いこざる　下戸の海を津
いろりぐろぐや　物毎　ふくいおと
めてやすのおへをちぐふかふのい物
書ハハ　ぐ門らいのを　見えて
四ぐり　葉がゑ　ふゆ　ゑ　行て居る

のしかさハ武ゑい男ゞゝ美代つる
おかさりかゝれてゐる馬の馬
下の白ハはゝ〳〵ゞゝこゝに
さんちんとゑもしらんてゐなる
りゝすてる竹ぐ居る新とゝのかし
弟ハ弟く意ひさんでゞ乗ゝち
竹ゞゝ出男ゝゑゐしすゑて居る
おちついゝゝこうゝハをゝふ娘人ゝ
ゝとゝ新かゑを出し

ゝゝ山ちんゝゝ下ゝ出ゝ張
ゝんちんゝのハは車いゝ出ゝ
ゝべハハゝ娘さかゝハしハぐゝい
のびとゝゝんひかゝ居を
ゝゝんの白いとおやちゝて居
ひゝ出ゝ下ゝ中ゝハくゝを
やく年小ゝ海原代ゝハしゝる
ぼゝかゝハゝ辻長下ケてゐる
きびやゝまちん切ゝせとゝハて居

ふるふるの波のうつるんとたいはいまとぢうり
ものしろくなんいハ家氏のおもをく
海辺て出しまさのうとおだんぢ出ル
波のわりをとる仲かしく湯へて入
先ってうしろふるうやうるうで出る
四つへ笠 先をうんてはとかさば
江口のうえ円ものはさんより
我ニねハ海の板へ手ねとやすあ
ひうこんの海くてやうりの花とく

大おかやうやうのまるうんと取し
先ってけ解かする 大一 衣
さいぶけかおてうりの絵をえる
ちいせんの素うをりへえるおこいる事
ふんろ金うく
ふしぶのおりこえてあげと書れ
たのあい京えん上どさのうり
はっうろいくしがるさかほうえを
ぶいぶんとすておくうのはだうり

男もじせいの大門でしつらひ
すゝ竹をさゝらしにして前とぞし
ひのかゞやくえぶらしいぶのてちぎ
あく月のいと小でしやるとふかくるの
でんゝゝさそうれるの大ぜんさ
とりかりかうさうひするをかゞ
ゆんゝとうとうるを和尚うくえを
をくうゝうち大をおく姫様
唐ゞ一かぐわ

さくじゞ四角おうりへうんて
ゆめじいちんちんゝゝと人ふきあり
師のいさくはのくはとえうんや
おゝりるいはゝかうちも大坂や
前掛をいりて新しゝとくい
ちんかのおぜせるでぐうし
ぼゝうちとさゝくゝ上そくい
さゝゝるいうちかからゝ前かおち
ちんゞちさくゝれせめとそれかき

やうなるのかへ言葉はいかに
天ちくらく人でこゝはのふく
そしぢりふぐるふの祝うち十四日
りふすもひするかをみかをうぐ
せイ面天さかたゝふてゝ居る
ゝゆぬくげえゝはうさけゝ
ちはさして居る そう出る 大一元
かくゝゆ後ふくぐかれこゝもつて
ゝかちゝと天つをあるゝうさ

ゝうしかくゝゝれはうゝゝはかる
かくゝえてひすをきめる出ふぐん
ちちのちんゝあくがんちたはぐく
福えりかくちを二人りゝはちがい
ねょのけゝ許りおけはちいく
かんひくのゝとゝぐゝていて居る
四角いぐちゝ川ゝぐぐ
ゝとゝくはゝゝけゝちゝ
ゝはさふ之ゝまねくかぬく

はすとゆかぶ　ゑりい　石ゑんが
人ゑゑ　大ゑゑ　ゑゑゑ　ゑゑゑ　ゑゑゑ
ぶれどゑゑと　ゑゑゑ　ゑゑゑ　ゑゑゑ
ゑれもかゑゑ　ゑゑゑ　ゑゑゑ　ゑゑゑ
かゑゑゑの　ゑゑゑ　ゑゑゑ　ゑゑゑ
ゑゑゑと　ゑゑゑ　ゑゑゑ　ゑゑゑ
ゑの　ゑゑゑ　ゑゑゑ　ゑゑゑ
ゑゑゑ　ゑゑゑ　ゑゑゑ　ゑゑゑ
ゑゑゑ　ゑゑゑ　ゑゑゑ　ゑゑゑ

ゑゑんでかゑゑゑ　石ゑゑ
ゑゑゑゑゑ　ゑゑゑ　ゑゑゑ　ゑゑゑ
馬のゑゑ　ゑゑゑ　ゑゑゑ　ゑゑゑ
大ゑゑゑと　ゑゑゑ　ゑゑゑ　ゑゑゑ
ゑゑゑ　ゑゑゑ　ゑゑゑ　ゑゑゑ
ゑゑゑゑ　ゑゑゑ　ゑゑゑ　ゑゑゑ
ゑゑゑ　ゑゑゑ　ゑゑゑ　ゑゑゑ
七月の　ゑゑゑ　ゑゑゑ　ゑゑゑ
ゑゑゑ　ゑゑゑ　ゑゑゑ　ゑゑゑ

川さーのそらんぞつぶ　はっぱつ
くぐきぎれてかんさーばかりてうさ
のくおくのうちさでひちくぐぎで　すそ
ぱんさんなしておぐてはじですそ
そくるのいかちくさんがうまのしり
かつぱくぐくりとかりて合とのあ
ひくさんや　るくめるせ　くめ
そーじゆぶくくのくちかるかぐちぱ
ぐちがちや　滅ぐのんぐるかくう　面

ちくちやくこのくきちかくさーぐ　きく
山ぐるのかひくりくさーぱ　神ちり
入ひあがやくくんとはぐくひづくーい
おくちくしいぱのいかをかし
二ちくこちかくくとちくちくしは　ちり
ぱかくちくぐ　ちくくくくくくたり
ぱかておくきくくはちぱくく
くをーくのくちんくをぱんく
ぐくかくくくくくくくくくくくくち

おなじ孫ふたりも和尚のうんで居る
くらいにせけんらしくだらでいのぐく
まもるとし見ばかりんくてへんるかて
すりあるとうのけて法師えじゃるる
さやじくくらいのはるぶふく居
地くとさいはひくのおもしろる
こうがいるは見てふこまて又泊ゆる
ちさしとたて見えまのくとあと上
ふうのどんしはい あるこしら あるく

どん中て人をあかしこ拳をゆる
ぬまちいるまじせいれるかこ舞沢
まのはあさふ紙のいるはる稼よ
ちんちんのはてちんこてアする
下者をあり の出はみくぐさ
後のあをい あをやくでわるい泊泊
めーとまもんぐ紙えふ世寿出る
がくや新ちさ下めがこんこふり
はこんてこうく七書とんて居る

夜とおもふのでうまをしかつつのゆり
星かうそうさそぼんぶもおれず
はしらい事へつるつぐれる森する
のきうんきやうきやうきやうきやう
ゆうしうあてゆ男を西行くきんきの
くうきうきを小柳の中かかんかくづ
きうきうきつてきうきまるきる
今はいあおきをきつくぶさるくく
国とはのいろるんたのぶんてい

うし馬をうけて行ぶんさかやを行り
線のおしやう　大坂おうぬりり
おをよく合せすつ行へ　生鮮め
おうきまるつをすをうけて出
くらい花すふ大ふおうさかへる
かんんんりろうの行ようくいる
ひうこうこしかうまるはてい者かり
器物りもおあけをうけを西あく
あやかのおふ一下ぶん中を行ヒ

きこし　毎年板をしいてたうを造る
なるのなる年　年寄を　勇治郎
さべの〳〵のまゆのけをやく　五三八
左衛門　うえかたり　小兵
あいあ　ぬぐるの　竹藤　なし
ちんさこ三年　かぢぬ　年ぶし
おぢまして　ふと　小武　初を　さうり
ものうるとそ　ものおもく
島の小へん　三ぶんまさを　約

通るものをへ　新をかりてやめ
ぬおの　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ
弥おのおそ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ
おもうんて　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ
病もなる　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ
ものりなる　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ
うんなぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ
もなかく　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ
さんぐさ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ

上下の武さへおりるおしをかけ
ちらしを作て戒金如信かし
ゆるの所四ツ時ちらと来りて来る
義もちらりのごと仲人ちめ連る
藤を左作を大名と為る乙作ひ
ちんぢら小村中ちりて茶をつくさ
山ちでかいかい四番とやてて出る
すりけちらと出り四ちしこと桑が為
四石ちらひするひまちくりいかり

網ちひかつ四とちんてほちを出し
角力ちり一ちちをちんで居る
おやし橋りちちすると郎ちこ
主人おちちしたちちちち作
赤坂小やちを四ちりくちして出る
ちちちちのいちちやい四ちかちかく
計と京ちりて お船をちりちお
之安あい作てちちさと売ちち
居ちの中かち引郎と縁ちけかさ

数酷なのく事云く
白ちとらてて男とえらうへば
年でしまいの四月を過ぎり
泣いばらびとしたとまりる源之助
ちうふひイる代とちいく二三歩
りいおさいしかむひへの西より金
ぎりそもぎてちるて年取おさく
二三なとかいくすちうる場ちば
二三ヨやへくちうんとすあんぐり

見ちもかさちおかをを考てたちの
ちなでかりちのぶしかくす人のよさ
もさいる金ふかもちりかおと
事のせいをかりこ場手てみちり店
流とちてぐ　やいよとちんて知ら
井戸や川のちるこ出はさしけ
かち井沢流おかうしくくしと居
かんぐの図　望中れ湯ふく入
まそぬかいおぬいかどちうり出

あれば皇へ、つんで西えを、やとり居る
うるさきまでとうんをとこめる
ゆびーー山くしとぎんをおりて出る
くるるもちひ波どうつぐ使者が居る
城波やさせ花をやまひしからしきは
花をひーーはいとさきひかるてくきろ
らんをんてらとばんをんて行
ゆるるを小ゆるかさとつう時りり
ちぐらんてえてもい事分山寺の家
ちさうをゆかは四うん場をとりて居る
小ぬるるのくぐるとしてをるをとうは
いうーー海てんくでわるいはひるきる
さんるをでいるかるの神伏ちはるて
波ちを文とちをいかるかるみとぐ
おりふさていうりるおやぐるり
えのをーーんのるをるとは師ふをつを
かつぐれこてびちをは二十ぐかりうう
波まくらや寺はかりうしけ孫ふが寺

すぐ町角小さな人きの
きいふんをつるくあしらから
ちんのちんにいりてのそばかも
きえをとえつけきくあいふつぐ出し
東京づき角のくつまのきや陸ふも
蛭のはしり物の大おかり
ちんさんがちすぐとぶらふきると泣
ゆとつめちんきいい二月二日
も一とやめきんやくで角きふぐ

初ちるる小蛭ハはいちゆ陸てかり
下ゝ町ちゆ岩津町がちり
ちちちてちんがちおいのおしぐく
今ゆふちと結ふ法もはてふかり
湯ちへて小ちていい二ゝ枝くりかり
高下りゝとしちんて一ゝぞさ
俵ちのちゆゆつ陸り物てゝ陸くさ法
ちいがて初ちふやちゆとくい
ゆうゝそと星のおちくいちて

法華のりきやうんどん　をけて
をて　をつて　居るより
ちよくのかーぐ　ぐ　因ハ　ぬ　こ　ら　い　ぐ
させんおーせんて　かくりさかりく
門ーしめれてるかどんとあ　ハ　ー
ぬ　ハ　ー　て　ま　ら　で　ぬ　を　ー　ん　く
結而、ま　く　ー　せ　い　こ　ぬ　ー　こ　る
ま　く　そ　の　せ　い　や　ぬ　ー　と　を　か　へ
ち　ら　ま　ま　と　大　海　の　中　ー　く

結　ま　り　や　の　ひ　く　ま　ま　て　ひ
花　か　前　ハ　ー　て　さ　ま　ぬ　ま　く　ま　花
ま　ま　ま　ぐ　ら　と　ー　ま　ら　た　大　ね
く　ま　の　ま　ら　ん　と　地　人　ハ　ま　ぬ　く
ま　の　ー　く　こ　ひ　と　ー　ハ　く　く　ま　ま　く
傘　の　四　の　ま　く　ぬ　ま　ら　い　に　新
ー　く　て　の　ひ　く　ま　ま　ハ　ま　く　ー　ひ　き
ま　ま　く　ぐ　ま　く　ー　王　る　ぐ　ま　く　ま　の
ま　屋　の　ひ　ま　く　く　ま　ま　る　ま　ま　け　ま　る

井戸ばたのあハすかしてをき毎
日ふさるよしにて桶ハ桶ハ
しハいぞうすもせいぐづれ
天しいろ紙たへらしらいと
ちをとりてもたらいでもをぶん
ばんふんをぶでかてをの桶とり
格板でけくとしてゐるかけ
桶かりをひかなんぶるろい首
ふけ西川ひとのことをとり

出ずつゐてふしりを返すぐし走ら
市ん行くを桶ばんハ海りをあなし
せいを聲西屋いてをおうをとして海うう
宿桶ばつをるしをのをくハ桶し
を津ふうけてハ海ぬを男をり
二三町出くさしかへるりしぐ
ぬへふ車ばるるしをんをんふし
海てをんぬ桶ハ使を海をつを男く
茶の門しを板の戸へ西しく

一ゑのく日月はるかゝるゝ
ゝるつゝきあるぐ仙家祝宮ゑし
を音ふうしをやらるゝゝゑ
はゝはいさんぶんゝ茶屋ぶそ
初さ向ゝゝぎしくゝゝゝゝゝ
之又がはゝいすりてもゝんゝゝり
ゝゝしゝゝゝゝゝ中ゝ河の体とする
来ゝゝぶんゝゝゝゝゝつゝゝゝゝゝゝ
汁ゝりいゝ世界のゝゝゝすゝゝゝ

之第ゝゝゝれゝゝ今千のゝゝゝ
手ゝゝゝゝゝゝのゝゝゝまて世界ゝゝ
之のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
今ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝてゝゝゝゝ合のゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝのゝゝ手んすゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝれゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
下すゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

はるこさいこうにたしなのうちへまつり
あう治のいつものとおりんぬすびく
ちらまつりとあいさえてうちふのくら
下おぼしいてちらい四ちそてて
ちさまのちの西いあるか　もとちら
おぼかしてはえと思ふかるちさ
ほうちられはるちらのちへあるつき
すけ笠で四郎ちんと伝てる
ぶくいちるも可ちてい色かる

おてんてうこ行んちそおいて来
首一ワみ百石余のかちてうり
きちつふもちすべ七郎ハ七里ハ
五ちるハいちやのちおりおくざる
大阪の治ちちちおくちて
首ら出くちちく人紙ちちし
ちぶ治ハおきやうどんをちて西い
おくていくてしほかいちちて
ゆちせちさんちつくしまちくみとそる

えんてきなるひかる
海やうんをえんおくの出へく
さるのかゝ鳥く大根からゝく
うゝ山にゝ目のいるるゝ表紙多
義のつゝのやいかうさして濃がすし
ゝるゝ社をすゝらかりおりろさ
は書ゝ売りてのかを食べて
せうつの子屋をゝいてゝるゝく
今年の市ハすりおかるゝぐゝく

一番とかゝとでゝるゝをゝづけゝる
さゝるゝやゝゝゝとゝゝでゝゝゝ
四月分小出ハゝゝゝゝいゝにゝや
ゝゝんゝゝのゝがゝるゝ牧やゝく去
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝんゝかゝのゝゝゝゝゝゝゝゝ
元中のやゝゝとゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝでゝゝとゝゝゝゝゝゝゝゝ
死ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

やばてもいろかうまんかうちをうち於よ
いんそうはけておゝ引出し　をううの
おさくとえさへ一ちくとうけ
梅か枝をぜひんいとしいでとしり
いろいろいはばかりふるとそん
大ふをそんりてもちもなれまく
四隅利も初てはおらざんかうの
主海ってそ大をさんかとさち
ゆうちいをつけれてはの藤をうい

おくぐろの四ちおさとかやうへ
らんがしいきのはかうのたうしお
茶屋さは四ちかしはとちぐうとき
ちいはかいでやくをんへうみ出身上
はの主ちをいとろうとする相
居ちもうとうとうれバ海ちのうん
おじしかしいしうとうとの
ろしい者をおはけれるどもの
いうのごおを実こさるちぶちあうとうい

まかいの嵐まそらけさな結ち
世やは天人みが居とすじところのく
くるひのもしほうら夢しえう色でつらい
おへんしとでんりくえらこそ多いつ
落人の玉国とかうふちらぶ小筆
石之士御くてんりん/\ちがいしうき
四すけさ金とえう宿下けしぶまれ
むよくあらんけさうしさびしけしとこ
いせの乃御むごけやしきまとて下さい

くる道島と海済し乎り　十之日
いつけやの声のうしのと　世居こしひ
ふそうま一の大こうか　あらく店
大浪ハせんかもとをかぬしあ
あらししら於してまちかきつとよ
計してを吹えしてハことハあそうしきは
我もうりまぶいせんさし御ちハつい
海くさぐんかすけ柴も太きし日へられる
すけぼんし　梳ハいやんく　世居の

けのさびおばり書はならひと也し
大かしたゞしきなをて御らむれり
下地やまさんと御たさ相かれけり
すんましと中きら出まし志ほしまば
おめしきみんれしつらひ楼とつま
遊のうすきうひさちと是つ銀々
恵しかしんぐ請まんとうとう
聞き様へ細りと御牛御ない引
たゞらふして去やうりめしへ出すり行

為田八とかく一まうひ二ま二へく
子をむかけてしかりしまゝへ此ぞの屋べ
でんちうとそうひへむつてるら養一あら
左手でむい今八ぬと御むしへさ
ふくまうふり里中けるのまてたまる
御さ車もかのと御ぜく引くえる
むやうらい出つかい名のとかくて
おらくろふかおかけてられるかゞつま坊
れるさすんへすとたりまへの子とりまし

言いおくんぞくでゲンゴ
世おやハもしまるのうそとそうてやり
小つゝとはくゝ話れてふざけもし
ゐのしえのゐうるゝ因ふ　ゐ唐ゝげ
ゐ之紅もゝ子えんもへびてせめらく
ゐゝ声ゝ声さゝとえばくうゝむし
くゝ世ゝ者ゝゝ　ゝゝ光ゝけて有る
借りて之ふ祇とすゝかゝつけ
ゆたゝいかゆらくの浦成ゐらく

三ゝ子ん四ゝそうそゝどゝがやゝ
世ゝのおちとかゝらくつけてゝ
十三番琴ハ月ゝのゝちそゝく
中車ゝゝハのゝくハゝ人がたゝ
かけゝゝの五ゝ白ハたゝ色く
声いせいふうそをつくをむをを
ゝゝゝんのゐふのゝく和合有る
ぶ仮がゝゝゝとおやぢゝざ
さん姫のおやゝ大ゝゝるせさぢゝ

仲人のいきの方とハでぞおちん
為手紙書き　ひすぶ　さらいく
ゆ　ゆ　ゆ　紙　ゆ　川　を　見世へ　出
かぶかぶ　人の　ひていかはつるかあ
めしまとうしえれハかりらの　墓
二夕　書き　ゆ　ゆ　ぶ　て　世　を　流り
ちちゆで　紙　ち　川　て　居　る　ゆ　い　二　ち　ち
ぶ　ゆ　人　ち　ち　ち　を　ま　い　人　郎　か　ま　る
ぐ　川　る　か　ち　る　を　ま　る　初　の　年

見せえへおちてのぞきふうまる
ゆぶかくがあイしどちの　所　返　ひ
ぶいしるやハいちちちをぎちく
のきちちいちちあやなすてはたさはな
やく　所　を　ぶ　ち　ち　か　ち　ち　ち　ち　い　る
ちちのかち　京へ　出　て　ま　ち　く　と　ひ
ゆち　世　年　門　か　ふ　ち　ち　ち　ち　ち　ち　く
ぐ　ま　い　ぶ　ん　の　ち　ち　る　ち　ぶ　ち　ち　ち　ち　ち　居　ち
人　の　ま　を　へ　ま　く　つ　を　ま　ん　ひ　ち　ち

すげうへすゑとなりて居るを見て
第一おもしろくるはえうはなり
おもてにかすりてきるゆの丁
むかつのとめぐしに固かし始いうり
二三十つくらいやうしをとりて
いのの社にてわるとしさ人のく
うへ洗ひ洗ひ洗ひてくしうをふくさん
おしてうへ見るとうきたつてうせ
美しくなりかすりかすりかすり
こりかん二日でしまとする子の方面
多ものおりんはなてをハおしるもの
流美ぐうまのがなの海ちくしん
海山ちかく見てくさぐるる
三ちうへんをやくやつてふさちくく
社者をおちすのでも明ぶびらく
ぶをのちうはめ色でぶれぶくく
すべおりけるもちとえふり
ひぐれ火と源左衛ハ 鬱ぬなり

[illegible]の上、初よりそのかふ西とし[illegible]
[illegible]ものや八月とひさ半てこうるこ
[illegible]ものさこ[illegible]すぐらと四民半一
[illegible]とくそくらくとらしゆ無要なる
姓のしなハ[illegible]こ[illegible]こ[illegible]ぐ[illegible]
[illegible]めこ[illegible]て[illegible]ると世界又まける
[illegible]とすぐこ西いとらしい蛙く
[illegible]くいとのく大小と祈ぐら
むとら武士市ぐ[illegible]ぐ[illegible]て毒の見かして

すめてせなどぐ[illegible]るはとさぐく
二人り[illegible]れこ[illegible]ふ[illegible]のかとこ[illegible]
とし[illegible]ひが[illegible]て八月[illegible]て[illegible]る物は
月とこ[illegible]ぐ[illegible]ぐ[illegible]ぐ[illegible]ぐ[illegible]の
某年中出て[illegible]は一紙代　百
大ぐ[illegible]り文
[illegible]辞いまり[illegible]
郷人の馬ぐ[illegible]ぐ[illegible]ぐ[illegible]
ぐ[illegible]ぐ[illegible]ぐ[illegible]ぐ[illegible]ぐ[illegible]

人とりくしてるとそんぞくそんぞくやう
濃ざくら神　あらくとと　ひ
いのちの花　ひめ　すを　海くおぶ　水と　さし
そそそでもおくそをそんーーとしひさかう
ひがらそんひあとどぐいが　あぐ　すば
はほぶぶんす　ひっと　おおおる
ちはあ　ーうてえさと　ぶ
濃そそりいそ　びや　竹え　とそ
かりでしのざら　あう　森で　えんぶう

ちらふあ　かけてちいさくりかれ
十七日のいりけはのハ　はは　ぶよ
海ふへくくあたあ　ふしはそくあ　ホ
文王くてのくはをく　喰ひ海　ら
ちくれとちかりとうぶた　石上　昭
きあのはふきんえかくかのた
男うあふあ　ふあるや　母そ　立
おうげでもいるうんきょとち　ひ
梅やくきかくえぶくへう　白

[illegible]ぐらいと[illegible]度一[illegible]かりの中
[illegible]ぐ大[illegible]一日ごと
[illegible]くなるいなくなるかくなり
[illegible]かるを行せいろいろハ行者ごと
琴こゝせんをすもで焼うがめ
面白きもちハ見て見が出来
江戸のすがのかも日中一が有
焼の祝　鯛　一　いとうを
大くぜつなるものすこぶるぜそもそ

もんのもの屋かいてんぐも
花を見てやさきてもあれやさきて
まちんくさすり秋かくこゝたい
法を祈りしのつりとして天合も
咲えてしよぐんてもいさ神へ入
幽おかりへしりふるかくさ
こゝちんとりちぐふすいつける
花のちれさかをぶまて出合第七
おもりそくく車とおすハ高くなり

文字をつらねて柳を大しめり
よきんめぐらしをしらく ゆうく自ら楽しみ
かれらんでゆきやし おふくらをまされる
山出しのかせをゆるくとつらく 合
伽羅でくまをしける えんくい居
其の神く 娘ハ其さへて あつくまる
残ぐんせい法◯よかるの出そのく
当世やハきんとむらの小やへ近
みそやてつ済ましいする ゆうそせし

むご婦をよしくいふをなせて居る
田舎とくませておつくのくお遊せ
ひつきれとりく 御所様 町
もつ 切らいやすしめ居もして嫁入
ぶ法ん何てうまんぢいさとおかなくら
さんじし おつまゑとえ 入れかさん何うさ
夜そぐ切 お上てのこよし 母とおに
おれをせく宮めがおさく ものまでして
くるしく 身ふさ中の映ふ行

人のうち中へのるつゝしゝ母
そばとかせぬのゝ後家のおちぶれ
ものし紙かしこまりちらさんる
そうく金もくでいゝをとちすぎる
せうんでもよがきちらそんぶをう
ちう紙ハすうんて居くいさんゆく
門ゝのあもせうこらせ式アしゝ
中のて屋きひしもかはは
国の一ゝからるがおうんのゝて居く

ゆうけくの侍ゝへしゝ寄やつく
きひすめとをゝくゝはあくい後家
ゝの云ゝく男おれと鳴て物ゝ遣
ゝ居馬ゝのやゝおとゝはあとく
ゝ家ゝおうさゝうちゝちゝる
ゝしゝ男ゝへうんゝやゝ壹
ふゝくゝこのゝハ初面のうしゝ
ゝいるゝ云ゝ馬やゝくゝ
ちんのゝちぶゝきてゝ紙ゝうく

意ハくとものの業とのひかりてる
き人あんしひしい姿してる
碎うしあうこの列をもはしし
かいかんしおつるのうちおかり
はそ角をつうんでをりて毒一人
あ京のさんをを中おこつうは
おてをうしるをとををうんて居
うしけのかつをとをうこ日午書
イよんをのむ川出集形

ひけをとをうんて仕ものをこうはお
をんわうじりはうを治うををしけ
又なっをれくるは出ま二人り法
ん人とつをんうをうでいのぐが用は立
う喰丁うでは喰んま紙喰て居る
をの紙を家ゝゝはをれるはざひ
二ゝこゝいををさをかゝは業ゝ
紙のをるををおるかていをすはは新
うんぶりゝうををとをうゝ

しんぞの草とおさしなかく
姓のあるじんし又せでもき人ゆゑ
佐吉の代るさんぬらに斎とそて
其力の兵衛門山のうしく山ゑかく
縁うちるやめる折るきとおぎ席し
其所がしさんのそうゆ男出る
説うちる更とさきし　めし
うさしむうあんてえてれなじうし
中村さぶらいとうれるなさい　佑文

きりかおぬわりふこりう人る夜のさき
風ふつでとなうゝ女房わうしく
かしえ衣のすらい水り其川が思
せんふじをあげて手代とくどく
わきせずきんでおあまりの弟子もせ
草のゆし嘆しせとせつきやしかくり出し
なんぞんとうしけふかあいの所そう露る
小むきやさそら川くおすいと思ひとやさ
いもが子ハやまでの来ぬもわさぬく

せんぞの山たをむすらりおすは
ぞしの若いさぞん筆をとくきり
かり夏の中うま馬を着をせし
せんかくしゆ中ふを人りい石きれ
おうこんすらとえんぞ〳〵色をてん
色をちいさちゆ家のぞくいちりく
くろ石をとさらしかいたへ出る
かうしかるむしものまる紙の紙
うちかはへかをを色ってくきうく色る

きやがんぞう蛇はせうをいりけるを
大一元ぬぐいかいらく〳〵うけ
すくうきくしのうきを紙に和とへかも
ぞちぎをの夢をメうと書つぐず
はつきなるいくく下せの広かなり
おつまきを矢ハ筆や広郎えく
をのいやさ下ぬをぞ板でくくまを
ぞかきを食のをものりハのやをぬをかひ
馬くづしをうちをらうをさ 添之作

七正月　花角力句合書板　催主　星運堂　薩秀堂

[illegible]　櫻木連玉章
[illegible]　柳水、鳳頭
[illegible]　牡丹、弓印
二タ瓜の二つ井て懸出す　柳水、玉簾
枝〻雫をもさとなる屋根　櫻木、左滿
桑〻[illegible]て[illegible]　柳水、排李
[illegible]　雨譚
[illegible]　蓬萊、田嵐

[illegible]人かゝでゆるして男柳うゑ
[illegible]の屋で帳を張る　櫻木、沒命
ひとものさゝもの[illegible]て走り　左
[illegible]　櫻木
[illegible]　朝日、巴喜
[illegible]　櫻木、和角
井戸[illegible]二つの[illegible]　柳水、岩木
さびしの[illegible]と切られ人の[illegible]　伊吾波、玉章
馬とゝ[illegible]ちくのゞ毒ぐて　櫻木、傳也
波一毎に[illegible]て　呵ら　左

花で因とつくハ八日の申渡之　朝日　巴丈
すゞしさやむさし野や枇杷とれ　桜井　吟半
白鷺しづかに歸つて見かへり　柳居　白鶯
みんじきの舎子すといふ居ハ居し　桜井　津長
春の海け様でぶるい秋の話を生　柳居　白鶯
やつまかゝるむぶる迷とさめて家に行　仝　丶
寒つ波と春情に行く君ゐ居る　杜若　下雷
姫のさらへ見迷し指先ゐ居　不易　華道
傘の雲絶まだ綿とゆけさかり　桜井　秋峰

花さらしどを出家ならう色　近江　庭印
あんじくともいけ化ハ花猿岡　招　桜井　淡路
白人すらつて家に二度めく　柳居　桃李
もりや大みんでふるすゝ白波　杜若　山蘆
そあうこかつ出綿とものとかく家　得意波　吉啟
苑玉模様と気さん中の丁　鳳凰　下雲
くまれなしいまのとあ人おて花を　柳居　桃李
まのとのと秋へ入ろ結い日和　淡々　紀是
八朔ふ白いかくやとも若い出川　杜若　山蘇

いでや此さらえせうぶとやせむ　柳々　素丸

一世一代浄金で翁々つゝさ　其葉　来徐

おもしろもなにもかも嫁の涼しさへ　詠　紀佳

まみ川点からそろおりうみ笹屋　桜川　素図

らをお化粧と立稲つまて出て　風々　九我

訪え数尾と去て怪の月　いては　当故

亀の子を娘の番頭へ入して出　桜々　律也

苦てかりハ孫へうふのそ見せし　全　亭林

さくお知せきせみへかへ帰さる　其葉　亜下

風情けのすゝさ見て売出る　柳々　龍子

ちうかうかハ子と生て孟うく　桜々　也章

やおおり世ミて一座るなる成　道和　鹿下

乞ろん汝ら彼人何り見がきる出る　桜々　ゝ林

声ゆん行く跳つかし流れて家　柳々　寿之

生うるか夜とめでともめき出し　桜々　幸成

思ひ逝いの名あるがぶ六かうへる　芳は　律也

花はかくらそうふへかけるおかしき人　杜々　如直

三十人詠ゝ年八十歳　全ゝ

新大や[illegible]てらとしてはなさ　いろは　玉章
のはぬのの[illegible]のさとをしらべる　椋本　秋笛
はけるこたみをうかべて　考る　鉢田　巴音
[illegible]　[illegible]　[illegible]　椋本　玉章
[illegible]　[illegible]　[illegible]　椋本　百濤
[illegible]　[illegible]　[illegible]　いろは　玉章
[illegible]　椋本　津長
どのこゑと中れひめ生死かり　同　〃
[illegible]　同　〃

○俳諧風書品目録　江都上野少王之藩　花壁蕉次郎

俳風柳樽拾遺十冊　川柳点句調同代名
同川傍柳　在川柳点句調同代名　同　やすひの[illegible]　江戸　川柳点
同柳句程角之道柄篇　六編刷出　江戸　五文字柳句物点者　抑物者
[illegible]　[illegible]　[illegible]
同[illegible]　[illegible]　同　百[illegible]　[illegible]
俳諧[illegible]